

旧名:石井 毅
木村 竹志

NPO法人和歌山野球振興協会・夢クラブ理事長

- 1961年 ● 和歌山県有田市生まれ
- 1979年 ● 県立箕島高校で甲子園春・夏優勝
- 1982年 ● 住友金属野球団で都市対抗野球優勝
- 1983年 ● 西武ライオンズ入団
- 1986年 ● 日本シリーズ優勝
- 1988年 ● 現役引退
- 2003年 ● 「夢クラブ」設立
- 2007年 ● 4月「和歌山スポーツアカデミー」開校
12月「紀州レンジャーズ」設立

力投を続ける あの夏のエース

和歌山色の夏を描く

昨年十二月、和歌山県にプロ野球チーム「紀州レンジャーズ」が

誕生した。それを発想し、実行した男が木村竹志。旧名を石井毅という。

甲子園史上に輝く名勝負の一つ、昭和五十四年夏の箕島・星稜戦。延長十八回にまで及んだ試合は今なお激闘として語り継がれている。勝利した箕島高校はその年、史上三校目(当時)となる春夏連覇を達成。甲子園



甲子園には春夏合わせて4度出場。甲子園通算勝利数は14勝(1敗)。

は和歌山色に染まった。その十八回を一人で投げ抜いたエースが石井毅。その熱投は同郷で伝説の大投手、嶋清を彷彿とさせた。今あの夏のエースは「木村竹志」として、和歌山色の新たな絵を描いている。

これからは地域のために！

高校ではただがむしゃらに、社会人では会社のために、プロでは自分のためにやってきた。「自分のDNAは野球、これしかない」。これからは自分を育ててくれた和歌山のために野球を生かそうと誓う。そして野球界にはない、ジュニアからプロにまでつながるピラミッド型のシステムを和歌山に作ることを決意。

まず「夢クラブ」を設立し、少年野球チームを組み入れた。さらに「もう一度頑張つて欲しい」と、高校野球で挫折した球児などの受け皿としてスポーツアカデミーを開校。故障が原因で引退した木村は、野球をしなくてもできない彼らに、当時の自分を見たのかもしれない。曰く「これらは一人では実現できなかった。仲間がいたから」。野球を通して

培ってきた多くの戦友と、さらに突き進んでいく。

和歌山を一丸に！

そしてついに作り上げたピラミッドの頂、「紀州レンジャーズ」。県民チームにしたいとの想いから、木村はNPO法人での運営にこだわった。選手の背番号を梅やみかんといった特産品にすることで、和歌山をアピールすることも考える。関西独立リーグへの参加を見据え、選手も揃った。木村は社会人時代のチームの再現をめざしている。「あのチームの役割は、企業宣伝ではなく、社員の団結を促すこと。スタンドからの地響きのような一丸となった応援は、思い出す度に体が熱くなる。このチームで和歌山を一丸にして、あの一体感を再現したい」。エースの力投はまだまだ続く。(敬称略)



Takeshi Kimura

伝説の左腕、野球殿堂入り

嶋 清一 (1920-1945)

「嶋のようになろう」。戦前、全国から目標とされた豪腕投手。和歌山市の海草中学(現向陽高校)の投手として、昭和14年、全国中等学校野球大会で、驚異の全5試合完封、準決勝・決勝ではノーヒットノーランを達成。明治大学に進学したが、学徒出陣により24歳でベトナム沖で戦死。明大野球部OB会は「戦争は若者の夢を奪い、命も奪う。平和の尊さを後世に語り継ぐために」と、嶋の殿堂入りを推進。そして亡くなってから63年後の今年1月、「甲子園の伝説」がついに野球殿堂入りを果たした。

